



研究論文 (Articles)

想像を描く発生の三層モデル (TLMG)¹⁾

—外国人集住地域で日本語指導を受けた中国人青年の変容のプロセス—

市川 章子

(一橋大学大学院 言語社会研究科 特別研究員)

The Three Layers Model for describing one's imagination
 -Focusing on The Modification Process of a Chinese Young Man Educated in
 The Highly Concentrated Area of Foreign Residents-

ICHIKAWA Akiko

(Hitotsubashi University Graduate School for Language and Society)

This study was conducted based on two purposes, which were: 1. to clarify the sociocultural factors which impacted a Chinese young man who was educated in a highly concentrated area of foreign residents in Japan and 2. to visualize his imagination. Especially, this research focused on the sociocultural factors which made him decide to stay in the Japan through analysing his process of moving from China to Japan. For collecting data, the researcher conducted a semi-structured interview four times, and the collected data was analysed with the three types of TEA, which were: 1. TEM, 2. TLMG and 3. CLVA. While analysing the data, the researcher made a hypothesis that creating imagination connected to the promotional sign, and she described the subject's imagination as a sign in the second range of TLMG. The results in this study showed that the subject's experience of the great Tohoku earthquake became BFP4/rupture and worked as the active state. Moreover, the necessity of creating the circumstance, where foreign students can learn their mother languages at schools and in the area they live in, was highlighted.

本研究の目的は、外国人集住地域で日本語指導を受けた中国人青年が中国と日本を移動する過程で、彼の内面的変化に影響を与える社会的文化的諸力を複線径路等至性アプローチ (Trajectory Equifinality Approach: TEA) を用いて明らかにするとともに、中国人青年の想像を可視化する試みを行うことである。4回の半構造化インタビューで得られたデータを TEM/TLMG/CLVA 図で描いた。その際、想像が起きることを促進的記号の発生と仮定し、TLMG の第2層で記号として描いた。結果から、東日本大震災に遭遇した経験が分岐点/ラプチャーとなり、能動的な探求を行っている有様が描かれた。日本語指導が必要な児童生徒に対して地域や学校で母語教育を構築する必要があることが明らかになった。

Key Words : Imagination, TLMG, TEA, Chinese young man, highly concentrated area of foreign residents

キーワード：想像，発生の三層モデル，TEA，中国人青年，外国人集住地域

1) 本研究は、横浜国立大学大学院教育学研究科に提出した修士論文を基に作成した。2015年度日本質的心理学会第12回大会で報告し、一橋大学大学院言語社会研究科に提出した博士論文の一部に加筆修正したものである。

1. 課題設定

1.1 日本語指導が必要な児童生徒の現状

1990年の出入国管理及び難民認定法改正を契機として、多くの外国人が日本に来日するようになった。法務省の最新の統計では、在留外国人数は中国が最も多く、次いで韓国、ベトナム、フィリピンなどのアジア諸国とブラジルが上位を占めている（法務省2020）。それに伴い、日本語指導が必要な児童生徒たちも増加している。日本の公立学校で教育を受ける外国人児童生徒数が増加したことをうけて、日本政府は、各自治体に教員の配置や国際教室の設置、学習ボランティアの配置などを行い環境整備に努めている。

文部科学省の最新の調査では、日本の公立小中学校に在籍する外国人児童生徒の就学者は、96,370人である。そのうち、不就学の状況にある児童は399人おり全体で0.5%を占めている。同様に、不就学の状況にある生徒は231人（全体の0.7%）いる。就学状況が確認できない児童は5,892人（全体の7.4%）、生徒は2,766人（全体の8.2%）いることがわかっていく（文部科学省2020）。

外国籍の子どもの教育機会に関する問題は、「国民を育てる」ことを前提としていた「日本の学校」の根幹にかかわる問題である。現行の制度では、日本に居住する外国籍の子どもが教育を受ける権利は保障されていない。ニューカマーについては、家族の意向、短期滞在か長期滞在かなどによって教育ニーズは異なるが、長期滞在化し、日本の公立私立の学校や高額な授業料が必要な外国人学校を選ばなかったり、選べない子どもたちは、不登校や不就学となる場合も多い（木村2015）。

ニューカマーを対象にした研究をみていくと、高校進学の際に情報の不足で進学を断念するケース（岡村2013）や入試制度を改善する必要性を指摘する研究（広崎2007）がある。広崎（2007）は、ニューカマー生徒を高校で受け入れる際に、低ランクの高校への入学だけでなく、中ランクや高ランクの高校にも入学できるように入試制度を整備し、中学校から高校への進学の段階で一人一人にとってより望ましい進路を選択できるような支援が必要であると述

べる。また、高校時代にアルバイト先で人間の尊厳を傷つけられる経験をし、自らの出自を隠す選択をした台湾人女性の事例（市川2017）も報告されており、ある日突然日本社会に放り込まれた子どもたちの来日以降の経験について詳細に認識することは今後の外国人の受け入れを考える際に必要な視点である。

1.2 当事者の語りを TEA で分析する意義

これまで、日本語指導が必要な児童生徒に関連した研究では、日本の学校文化を理解できずに閉鎖的な人間関係を形成する高校生の事例が報告されている（趙2007）。また、地域社会の支援の確立の重要性（岡村2013）がいわれており、日本語指導が必要な児童生徒の成長に寄り添い、長い時間軸で当事者視点から学校の教育や地域社会での経験を捉える研究が必要とされる。

趙（2007）では、日本の学校の生徒と教師の関係は、学業成績と同時に、行動評価という独立した軸が存在しており、教科指導のほかに生活指導や部活指導なども重要な役割を果たすという。外国につながる子どもたちについて研究した岡村（2013）は、「就学前支援」「就学支援」「日本語教室」「母国語教室」などの支援が体系的に行われているのは、主に小学校や中学校の義務教育課程においてであり、高等学校では、小中学校で行われているような支援体制が整っていないことが多いと指摘する。また、学校に馴染めず居場所がない、学校の教師に信頼感が抱けない等の理由により不登校となり、高校に進学できなかったことを後悔している20歳の青年の事例を紹介している。外国につながる子どもたちが日本社会とのつながりを持つために、公式的、非公式的なサポートが必要不可欠と述べている。

こうした問題意識のもとで、「複数の異なる径路を通ったとしても同じ到達点に達する」という等至性（Equifinality）の特徴を持つ複線径路等至性アプローチ（Trajectory Equifinality Approach: TEA）（サトウ2017a）を分析方法として採用することで、外国につながる子どもたちが日本で成長するプロセスと母語教育の実態や公式的、非公式サポートについて質的に明らかにできるのではないかと思われる。

一方で、インタビューで聞き取った外国につながる子どもたちの語りを分析していた際に、ショックを受ける出来事、例えば、外国人差別、人種差別、大災害に遭遇した際に、実際に経験している出来事だけでなく、過去や未来に思いを馳せるような語りに遭遇するようになった。この語りは、過去志向促進的想像、未来志向促進的想像、過去志向抑制的想像、未来志向抑制的想像（サトウ 2015c）の理論を用いて考察可能ではないかと考える。そのため、本稿における研究とは、複線径路等至性アプローチを用いて研究するという側面と、TEMで想像を描く試みという側面を持つ。

1.3 研究目的

本研究の目的は、外国人集住地域で日本語指導を受けた中国人青年が中国と日本を移動する過程で、彼の内面の変化に影響を与える社会的文化的諸力をTEA (Trajectory Equifinality Approach: TEA) を用いて明らかにするとともに、中国人青年の想像を可視化する試みを行う。

2. 研究方法

2.1 研究デザイン

協力者は、日本国内の外国人集住地域の公立中学校で日本語指導を受けた経験を有するBさんである。本研究における外国人集住地域とは、外国人が集まり住んでいる地域と定義する。協力者の選定にあたっては、大学で日本語教育を専攻する日本人学生に紹介を依頼した。調査開始時において筆者と協力者は初対面である。協力者のプロフィールは、表1に表した。年齢・職業は最終インタビュー時のものである。

インタビューを進めていく中で、中華学院から公立中学への編入や、公立中学から大学進学、大学の

退学と再入学という過程が明らかになってきた。本研究では、中華学院から日本の公立中学へ編入している点、Bさんの夢が軍人になることから発展途上国支援に関わる仕事に就くことに変化している点に関心を持ち等至点を設定した。外国人集住地域で、日本語指導を手厚くうけたBさんは、母語である中国語も外国語である日本語も大学進学レベルまで育っている。しかし、青年期に入り本名と日本名の使用で葛藤を感じていることから、本研究は、日本語指導が必要な児童生徒の教育や支援に対して必要な知見が得られると思われる。

調査対象者の概略

日本語未習で中学1年で来日した。中国にいた間は、日本人との接触がほとんどない環境で育った。来日は、両親がBさんによりよい環境で教育を受けさせるためであった。母親が先に来日し生活基盤を整えた後、Bさんが単独で来日した。中華学院でしばらく学んでいたが、経済的な理由と日本の大学へ進学を考えて公立中学に編入する。編入後は、母語教育を受ける機会はなかったが、中国語のできる中学校教師や友だちと交流した。父親は、Bさんが高校1年になると同時に来日し、それ以降はBさんと母親と三人で暮らしている。大学受験は、家族の期待に応えるために第一志望ではない日本の難関大学に進んだが、専攻が合わずに半年で退学。アルバイトで貯めた資金をもとに東南アジアに自分探しの旅に出かけた。翌年自ら志願した大学を再受験し合格を果たす。大学生になり人種差別が存在する日本の社会構造に疑問を抱いている。成長するにつれ日本の味方をするようになったと父親から言われるようになった。将来は日本に定住しグローバルに活躍したいと考えている。中華人民共和国大連生まれ、漢族。

表1 プロファイル

	性別	年齢	両親が教育を受けた国	来日理由	来日時の年齢	帰国回数	職業
Bさん	男性	24	中国	よい教育を受けるため	13歳	長期なし 短期年に1回	会社員

調査時期・調査地・研究方法

2014年4月から2016年6月にかけて合計4回の半構造化面接を行った。面接は、協力者に指定された外資系コーヒーチェーン店(1回目から3回目)と喫茶店(4回目)で行った。本研究では、来日前の中国での経験から大学生になるまでの経験について対面で計4回の面接を行い、実際に、3回目と4回目の面接でTEM図をBさんに見てもらった。TEM図を協力者に見てもらうことで結果の真正性を担保した。TEM図作成のプロセスでは、3回会うことが推奨されている。これを「トランスビュー(Trans-View)」と呼び、3回目の聞き取りでは相互の主観が融合した形の聞き取り(サトウ2015b)が可能になる。協力者に対しては、主に日本語によるインタビューをおこない、必要に応じて中国語を使用した。論文の公開に際し、許可を得た。

倫理的配慮

面接を始める前に、調査への協力は自由意思によるものであること、調査協力はいつでも中止できること、収集したデータは研究目的のみに使用し、個人のプライバシーを侵害しないことについて口頭説明を行い、面接内容の研究使用とICレコーダーによる録音の許可を得た。

分析方法

複線径路等至性アプローチ(Trajectory Equifinality Approach: TEA)は、個人が環境の中で生命を維持し人生を全うするために記号を取り入れ生きていくプロセスを描く(サトウ2015a)。TEAは、複線径路等至性モデリング(Trajectory Equifinality Modeling: TEM)、歴史的構造化招待(HSI)、発生の三層モデル(Three Layers Model of Genesis: TLMG)を主要な要素とする方法論である(サトウ2015a)。「ベルタランフィによるシステム論の開放系(オープンシステム)は等至性をもつ」というテーゼに依拠した等至点(Equifinality Point: EFP)は、TEAの根幹の概念である。等至点には、等至点と対極の意味をもつ両極化した等至点(Polarized EFP: P-EFP)を設定することが重要である(サトウ2015a)。等至点の前にはいくつかの径路の分かれ

道が存在する。それを分岐点(Bifurcation Point: BFP)と呼ぶ。発生の三層モデル(TLMG)は、TEAにおける「自己のモデル」である(サトウ2015a)。

インタビューをもとに作成した逐語記録を、KJ法(川喜田2009)の手順を用いてラベルを抽出し、実際に経験した概念については75個のラベルが抽出され、時間を空けて実施したクローバー分析では、17個の語りが抽出された。75個のラベルについては、TEM図(図3、図4、図5)に径路や信念・価値観レベル、SD・SGとして示している。その後、TEMの基礎概念である等至点(EFP)、両極化した等至点(P-EFP)、社会的方向づけ(Social Direction: SD)社会的助勢(Social Guidance: SG)、分岐点(BFP)、必須通過点(Obligatory Passage Point: OPP)、価値変容点(Value Transformation Moment: VTM)を用いて整理し、発生の三層モデル(TLMG)とクローバー分析(Clover Analysis: CLVA)による分類を行った。

本研究では、廣瀬(2012)を参考に、EFPとTEM図全体におけるTLMGの作成を行った。その後、上川(2017)を参考に、時期区分の分類および経験の細かい分析と図示化を行った。さらに、伊東(2017)を参考に、TLMGの信念・価値観レベルと個別活動レベルの記述作成を行い、SDやSGがかかる位置について検討し、市川(2017)のクローバー分析を参考に、想像を描いた。

2.2 調査概要

論文の公開に際し、Bさんに対して2017年5月下旬にメールで内容の最終確認を行った。インタビューは、ライフストーリー・インタビューを通してTEM/TLMG図を完成させた廣瀬(2012)のインタビュー方法を参照した。インタビュー方法については、廣瀬(2012)の表やTEM図およびTLMG図を確認しながら、経験と内面の語りが得られるよう配慮しながら進め、インタビュー内容について筆者と協力者の間に認識の違いがないか確認しながら進めた。インタビュー時間は、ICレコーダーで録音した時間を表記している(表2)。

表2 インタビュー概要

	第1回 (2014.4)	第2回 (2014.11)	第3回 (2014.12)	第4回 (2016.6)
時間	1時間49分	1時間42分	26分	31分
インタビュー項目	半構造化面接	半構造化面接	半構造化面接, 修正点の確認, フェイスシートへの記入	半構造化面接, TEM図の確認
	①中国での誕生から来日までの経緯 ②家族関係 ③日本語教育	①中学から大学までの体験 ②家庭の教育と両親の言語使用	①教育歴, 言語教育について	①東日本大震災について

インタビュー調査では、対面での面接を行った。Bさんとのやり取りでは、ICレコーダーで録音していない時間に重要な語りが得られることがあり、メモを取り、記述やTEM図作成に活かした。対面での面接以外にも疑問点についてメールで確認をとった。1回目から3回目までのBさんの職業は大学生で、4回目の面接時は会社員である。4回目の面接では、Bさんから新たに分岐点<東日本大震災に遭遇>と大学中退後の変容について指摘があった。改めて逐語記録を分析した結果、東日本大震災から大学卒業間際の際に内面の変容がみられた。この時期の逐語記録を対象に Zittoun の想像の回路にヒントを得たクローバー分析 (サトウ 2015c) を行った。Zittoun & Cerchia (2013) は想像の回路について、突発的出来事が起きた時 (Rupture as disjunction) 想像の回路 (Imaginary loop) は、現在の具体化された世界 (Experiences present embodied world) からかき離れたものであるという。サトウ (2015c) では、

Zittoun の想像の回路 (Imagination as a loop) を基に想像の方向について過去志向促進的想像、未来志向促進的想像、過去志向抑制的想像、未来志向抑制的想像の四つの次元に分類している。

本研究では、サトウ (2015c) および市川 (2017) のクローバー分析の分類基準に Zittoun & Cerchia (2013) の想像の理論を加えて、クローバー分析の意味 (表3) を作成した。

想像の定義

本研究における想像とは、木戸 (2015) を参照し、共有された経験や社会的表象などによって社会的に作られるものと定義する。人生が違った展開になりそうだと想像した場合、時に人々はラブチャー (rupture: 突発的出来事) をつくり出す。ラブチャーは想像を呼び起こし、あるラブチャーのあとには、能動的な探求を行うことが必要となり、人々は新たな状況でどう生きるか、過去から何を学ぶかを考え

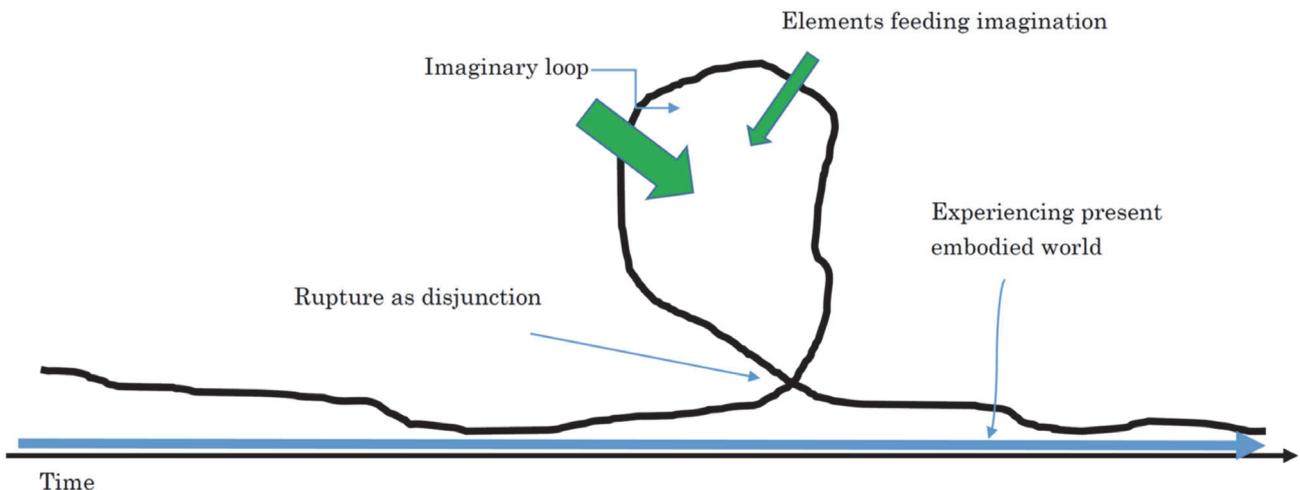


図1 Imaginary loop

Zittoun & Cerchia (2013: 314) をもとに筆者作成。

表3 クローバー分析 (CLVA) の意味

	意味
未来志向促進的想像 (Future Oriented Promotional Imagination : FOPI)	人が非可逆的時間を生きるなかで、分岐点において将来起こりうる経験や出来事及び社会的状況等に対して促進的な想像が起きている時の語り
未来志向抑制的想像 (Future Oriented Restrain Imagination : FORI)	人が非可逆的時間を生きるなかで、分岐点において将来起こりうる経験や出来事及び社会的状況等に対して抑制的な想像が起きている時の語り
過去志向促進的想像 (Past Oriented Promotional Imagination : POPI)	人が非可逆的時間を生きるなかで、分岐点において過去に起きた経験や出来事及び社会的状況等に対して促進的な想像が起きている時の語り
過去志向抑制的想像 (Past Oriented Restrain Imagination : PORI)	人が非可逆的時間を生きるなかで、分岐点において過去に起きた経験や出来事及び社会的状況等に対して抑制的な想像が起きている時の語り
中核の想像 (Core Imagination : COIM)	人が非可逆的時間を生きるなかで、どうありうるか、どうあるべきでないかへと向かわせる想像 (代替的な現在) であり、その語り

(サトウ 2015c; 市川 2017; Zittoun & Cerchia 2013) をもとに作成

るのである (Zittoun & Saint-Laurent 2014; Zittoun 2017)。

TEA における TLMG は、記号を媒介に変容していく人間の内面的過程を捉える機能を持つ (中村 2015)。また、「TLMG は、個人の内的変容を、個別活動レベル、記号レベル、信念・価値観レベルの3つの層で記述・理解するための自己モデルである」(安田 2015)。TLMG では、中心の第3層は価値、第2層は記号、第1層は行為の層を意味し、第2層で促進的記号が発生すると考える。第2層で記号が発生することが分岐点にほかならず、言い換えれば、分岐点とは関連情報の内化が第2層に到達し、促進的記号が発生することである (サトウ 2015a)。

想像を記号として考える

そこで、想像が起きることを促進的記号 (Promoter Sign : PS) の発生と仮定し、TLMG の第2層で記号として描くことにした。促進的記号とは、個人的な価値思考として深く内化され個人に作用する記号のことである (Valsiner 2007)。静的な記号ではなく、個人の判断や行為をガイドする未来志向的な動的な記号である (サトウ 2015a)。

TEA で想像する (Imagining TEM)

TEA では、分岐点でどのような想像が起きている

るかという分析法の一つとしてクローバー分析を仮定する。そして、想像 (imagination) についても取りあげていくのがクローバー分析である。同時に、分岐点は「選択肢が現れる時点」であり、「記号の内化ポイント」である (サトウ 2016)。つまり、TEM で想像することとは、人間の発達と相互に対立する特徴が、現在の境界を横切り、未来と過去とを関連付けることである (Zittoun & Valsiner 2016: 17)。

クローバー分析 (サトウ 2015c) の理論を基に作成したクローバー図を図2に示し、クローバー分析の意味を表3に示す。分類に際して、過去と未来のどちらに向かって語っているのか、促進的あるいは抑制的な想像の分類については、面接の際のBさんの様子や声の抑揚と速さなどに着目し分類した。

次に、本研究における TEM の用語と意味をのべる (表4参照)。

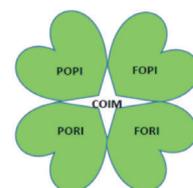


図2 クローバー図

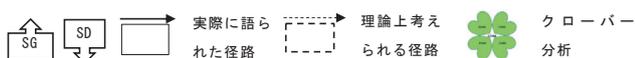
表4 TEMの用語ならびに本研究における意味

用語と基礎概念	本研究における意味
等至点 (EFP) 研究者が関心を持った経験 (サトウ 2012)	EFP1: 公立中学に編入 EFP2: 発展途上国支援に関わる仕事に就く
両極化した等至点 (P-EFP) 等至点の対極にある点	P-EFP1: 中華学院で学び続ける P-EFP2: 発展途上国支援に関わる仕事に就かない
分岐点 (BFP) 分かれ道 (サトウ 2015a)	BFP1: よりよい教育環境を求めて来日 BFP2: 中国語に通じる環境 BFP3: いじめを経験する BFP4: 東日本大震災に遭遇
価値変容点 (VTM) 価値変容の時点 (廣瀬 2012)	中国人であることを隠すのをやめる, 経済的に自立するだけでなく人を幸せにする仕事に就きたい

3. 結果

中学1年で来日し日本語指導を受けたBさんの径路を可視化した。

TEM図(図3から図5)では、表示のないものについては下記の意味をもつ。



文章の記述は、クローバー分析の結果を {} で表示し、その他の経験を < > で表示した。「」はBさんの語りであり、() は筆者がつけた補足である。

3.1 Bさんが発展途上国支援に関わる仕事に就くに至るまでのプロセス

本研究の時期区分は、学校での教育内容・教授言語の変化に焦点をあて分類した。第1期は、誕生から来日までである。第2期は、中華学院から公立中学編入までである。第3期は、編入から公立中学卒業までである。第4期は、県立高校入学から東日本大震災遭遇までである。第5期は、東日本大震災から大学生までである。

第1期 両親の愛情を受けてすくすくと成長

Bさんは<中国で中国人の両親の元に生まれる>。幼稚園の頃から<父親との読書開始>し、この頃から<生き方について父から学ぶ(SG)>。誕生から来日までを大連で過ごした。テレビを通じて軍隊に関する番組を視聴する機会が多く、<軍隊への憧れ(SG)>が芽生え<軍人になるのが夢(6から8歳)>

だった。<豊かな文化体験(SG)>をして成長していく。<小学校入学>すると<英語教育開始(小1から小6)>する。この頃から<客観的に物事を捉える視点(SG)>を養っていった。<父親との相互読書活動>を行うようになる。教育熱心な父親は知合いの伝手を使いBさんが<重点小学校に編入>する道をひらいた。重点小学校に入学後も<家庭での読書活動の継続>の環境があり<自由な国「日本」への憧れ(SG)>の気持ちが養われていった。重点小学校を卒業し<中学入学>後に通学していた学校で<軍事訓練を経験(OPP1)>する。ある日訓練から帰ってくると来日を告げられた。

第2期 初来日の戸惑いと新しい出会いの喜び

<よりよい教育環境を求めて来日(BFP1)>すると、<中華学院に編入>した。来日直後は<日本語が理解できず辛い(SD)>思いをしたが、<中国人・中国語のわかる日本人と出会う(SG)>ことで不登校にならずに済んだ。授業についていけず悔しい思いもしたが<中国語に通じる環境(BFP2)>で過ごしたことが分岐点となった。中華学院に編入後しばらく経つと<日本に熟知した叔母からの助言(SG)>で国際教室のある<公立中学に編入(EFP1)>した。

第3期 試行錯誤しながら主体的に成長

経済的な事情や将来の大学進学を考えて、中学二年から公立中学に編入したBさんは、<日本名を名乗り通学(OPP2)>するようになる。在籍していた公立中学では、<同じような境遇の仲間に出会う(SG)>ことで勇気づけられた。<国際教室通級開始>すると<公立中学でのボランティアの支援・存

在 (SG) > に助けられた。同時に < 地域日本語教室に通う > ことで学校外でも日本語の学習や教科の学習に力を注いだ。 < 卓球部で友人との友情を深める > ことで < 楽観的に日本の生活に溶け込む >。この時期、母国でも人気のある < 卓球部での活動 (SG) > と < 中国語がわかる教師の存在 (SG) > が B さんの学校生活を支えた。部活動はいいことばかりではなく < いじめを経験する (BFP3) > 時期もあり < 日本型いじめを体験し心が痛む (SD) > こともあった。いじめに対する教師の対応に幻滅し < 日本の教師への絶望 (SD) > を感じた。 < 日本で苦勞する母の姿 (SG) > を近くで見えていたのでいじめに関わるのをやめて < 日本語の猛勉強 > に打ち込む。日本語学習の努力が実り < 友人とコミュニケーションがとれる > ようになっていった。中学卒業前に < 日本語能力試験一級合格 > を勝ち取り自信がついた。その後、人が決めたのではなく < B さんが志願する高校を受験 > し合格する。中学で出会った教師は、異国にいても存在を認めてくれたと実感し、 < 中学卒業 > の日を迎えた。

第4期 経済的自立と学業の両立に邁進

< 国際化に力を入れている高校に進学 (OPP3) > すると同時に < 父の来日 (SG) > という嬉しい出来事が訪れた。 < グローバルな学校環境 (SG) > で < 運動部に入りチームワークを学ぶ >。入部した運動部では全くの初心者だった B さんは < 仲間の存在 (SG) > に支えられ人間として成長していった。帰国子女も多数在籍する < 外国人差別のない学校環境 > のびのび成長する。高校では、 < 家計を助けるためアルバイト掛け持ち > し < アルバイトで社会を知る (SG) >。受験の直前は、B さんのアルバイト代を学費に充て予備校に通い < 家族の希望する難関 A 大学を受験し合格 > した。

第5期 東日本大震災から大学生まで

高校の卒業式の直前に < 東日本大震災に遭遇 (BFP4/ OPP4) > し、 < B さんが中国人であることを隠すのをやめるプロセス (TLMG) > をへて、 < 経済的に自立するだけでなく人を幸せにする仕事に就きたい > < 中国人であることを隠すのをやめる (VTM) > に達し、 < 発展途上国支援に関わる仕事に就く (EFP2) > に到達する。

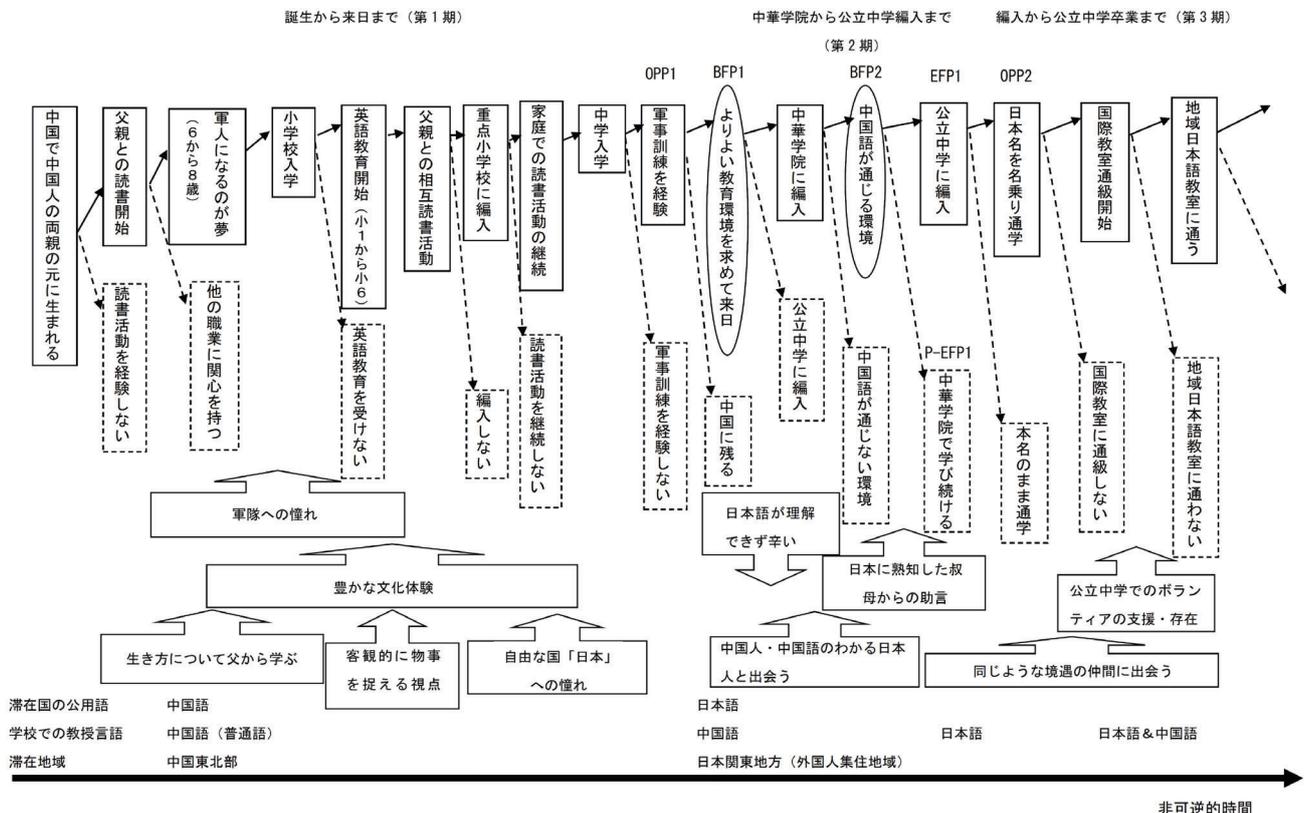


図3 BさんのTEM図1/2

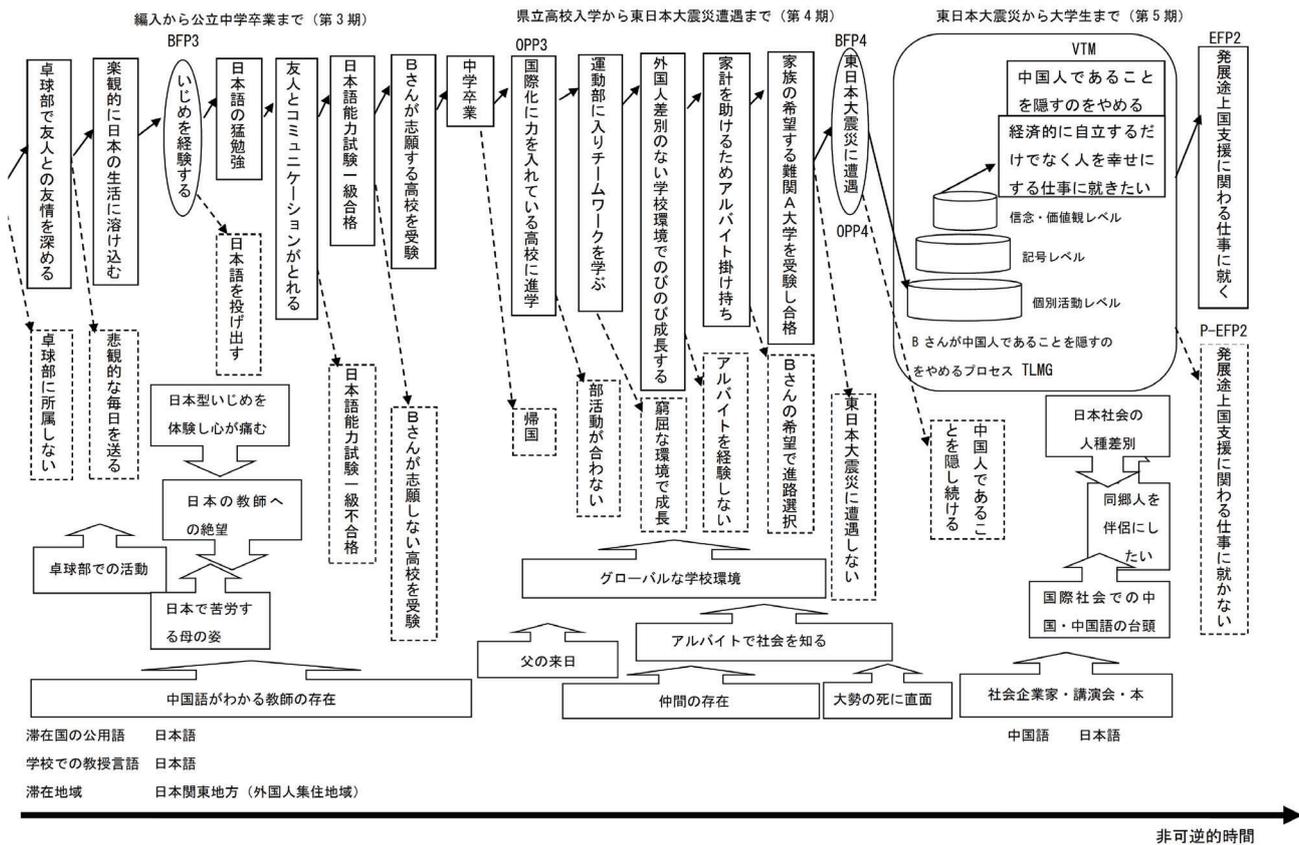


図4 BさんのTEM図2/2

表5 本研究における三層の捉え方 (TLMG)

最上層 (第3層)	信念・価値観レベル	中国人であることを隠す自分に対する意味づけの変容
中間層 (第2層)	記号レベル	中国人であることを隠すのをやめるまでに記号として、Bさんの信念・価値観レベルに影響を与えている要因
最下層 (第1層)	個別活動レベル	東日本大震災を経験し中国人であることを隠さなくなるまでの道のり

3.2 想像を描く発生の三層モデル (TLMG)

TLMGでは、東日本大震災への遭遇から自己を隠すのをやめ、中国人差別との戦いを通して社会貢献できる仕事を目指すまでを描く。本研究における三層の捉え方を表5に示す。

高校の卒業式の直前に「東日本大震災に遭遇 (BFP4/OPP4)」した。「大勢の死に直面 (SG)」し「周りの助けがなければ一人で生きていけない (FORI)」 「命は小さい (FORI)」と実感する。当時を振り返り、「一人だと死にます (FORI)」と語り一人でいたら死んでしまうと実感する。「震災で助け合う」経験を通して、将来自分が成長し「上の(身分の)人になったら誰に対しても優しく (FOPI)」

したいと誓う。震災で助け合う経験を重ねたことで、それまでは信念・価値観レベル「お金の為に働く(利益が大事)」と考えていたが、「経済的に自立するだけでなく人を幸せにする仕事に就きたい(利益だけでなく人を思いやる)」生き方をしたいと思うようになる。東日本大震災の混乱が収束しないなか、家族と親戚の「期待に応えるため難関大に進学」し、親戚の勧める企業に就職を目指して大学生生活をスタートした。しかし、大学の授業内容に「興味を感じず半年で退学」してしまう。しばらく日本で過ごした後、旧正月に「中国に帰国し親戚に相談」とすると難関大を辞めたことを知った親戚は、中国の大学入試に挑戦し、歯科医師になるよう助言した。

表6 クローバー分析の分類結果

信念価値観レベル		記号レベル
日本名を名乗り外国人であることを隠す	お金の為に働く (利益が大事)	{周りの助けがなければ一人で生きていけない (FORI)} {命は小さい (FORI)} {一人だと死にます (FORI)} {上の (身分の) 人になったら誰に対しても優しく (FOPI)}
	経済的に自立するだけでなく人を幸せにする仕事に就きたい (利益だけでなく人を思いやる)	{日本名使って隠されたいな (POPI)} {(中国人であること) 恥ずかしくてばれたらヤバイな (FORI)} {日本語がうまくても音調 (発音) が違ってすぐばれる (FORI)} {自分が中国人だったら隠されたままで生きていいの (COIM)} {ほんとに友情持ってお互いに心込めて付き合いたいなら (FOPI)} {中国人日本人であっても隠す必要なんかない (FOPI)}
中国人であることを隠すのをやめる		{堂々と見せるべき (FOPI)} {外国人でも今は堂々と言える (COIM)} {受け流し (FOPI)} {相手の強さを利用して自分の能力を加え自分の成果として出す (FOPI)} {先々読むのも異国に来て生きるための方法 (FOPI)} {世の中の波を読んで波に自分が上に乗るのが一番 (FOPI)} {(自信は) ずっと, 正直ずっと (ある)。ずっと (と) 言ってもいい (POPI)}

クローバー分析によって17の想像の方向が得られた。Bさんの内面は、＜東日本大震災に遭遇＞後、未来志向抑制的の想像が続き震災で助け合う経験を経て未来志向促進的の想像が出現する。その後、中国に帰国し過去志向促進的の想像を経て、未来志向抑制的の想像が続く。大学への再入学後、同じ志をもった友人やアルバイト先の店長との出会いを通じて未来志向促進的の想像が連続して出現した。日本名を使用していた過去を肯定し過去志向促進的の想像が出現し＜社会貢献できる仕事を目指す＞が導かれた。

想像は、実際の行為の径路から距離をとるよう求め、時間の非可逆性や因果関係という制約から距離をおき、現実から「浮遊」する経験のモードに人々を結びつける (Zittoun & Cerchia2013)。BさんのTLMGの第1層では実際の行為の径路が描かれ、第2層では現実から「浮遊」した経験のモードが想像によって可視化された。

3.3 Bさんの選択に影響を与えたSDおよびSG

次に、TEM図からとらえたSDとSGを表7と表8に示す。SDとSGは文化的・社会的な諸力を概念化したものである (安田 2015)。

表7 TEM図からとらえたSD

用語と基礎概念	本研究における意味
社会的方向づけ (SD)	日本語が理解できず辛い (第2期)
等至点に向かうのを阻害する力 (安田 2015)	日本型いじめを体験し心が痛む (第3期) 日本の教師への絶望 (第3期) 日本社会の人種差別 (第5期)

社会的方向づけ (SD) は、等至点に向かうのを阻害する力 (安田 2015) である。本研究では、4つのSDが得られた。第1期から5期についてまとめると、来日前にSDは見あたらない。日本語未習で来日したことや学校文化への戸惑いがSDとして作用し＜発展途上国支援に関わる仕事に就かない＞という方向に導く要因になったことが示唆された。対照的にSGは、中国と日本の経験のどちらでもとらえられた (表8参照)。

表 8 TEM 図からとらえた SG

社会的助勢 (SG) 等至点への歩みを後押しする力 (安田 2015)	
本研究における意味	
生き方について父から学ぶ (第 1 期) 軍隊への憧れ (第 1 期) 豊かな文化体験 (第 1 期) 客観的に物事を捉える視点 (第 1 期) 自由な国「日本」への憧れ (第 1 期) 中国人・中国語のわかる日本人と出会う (第 2 期) 日本に熟知した叔母からの助言 (第 2 期) 同じような境遇の仲間に出会う (第 2 期) 公立中学でのボランティアの支援・存在 (第 3 期) 中国語がわかる教師の存在 (第 3 期) 卓球部での活動 (第 3 期) 日本で苦勞する母の姿 (第 3 期)	父の来日 (第 4 期) グローバルな学校環境 (第 4 期) 仲間の存在 (第 4 期) アルバイトで社会を知る (第 4 期) 大勢の死に直面 (第 5 期) 社会企業家・講演会・本 (第 5 期) 国際社会での中国・中国語の台頭 (第 5 期) 同郷人を伴侶にしたい (第 5 期)

本研究では、20 の SG が得られた。第 1 期から 5 期までまとめると、親との関わりや豊かな文化体験が B さんの成長を後押しし来日後の人間関係の形成に影響を与え公立中学に編入に至った。公立中学へ編入後は学校やアルバイト先での人との出会いを通じて経験を積んでいく。公立中学編入後、B さんにとって「東日本大震災に遭遇」が分岐点／ラプチャーを作りだす契機になったと考えられる。「ラプチャーのあとには、能動的な探求を行うことが必要となり、人々は新たな状況でどう生きるか、過去から何を学ぶかを考えるのである」(Zittoun & Saint-Laurent 2014; Zittoun 2017)。すなわち「中国語は中国大陸のほうが市場もあるし使う人も多いし、世界中には華人というか華僑とかいるので」と能動的な探求が B さんに起こり「発展途上国支援に関わる仕事に就く」という方向に導くことが示唆された。

3.4 B さんの選択に影響を与えた OPP

次に、TEM 図からとらえた OPP を表 9 に示す。

表 9 TEM 図からとらえられた必須通過点 (OPP)

名称	定義	B さんの必須通過点
制度的必須通過点	法律で定められているような行為・経験	軍事訓練を経験 国際化に力を入れている高校に進学
慣習的必須通過点	慣習的に行われる行為・経験	日本名を名乗り通学
結果的必須通過点	結果的に多くの人が行う行為・経験	東日本大震災に遭遇

(サトウ 2017b: 209) をもとに作成。

安田 (2017) によれば、OPP は、制度的必須通過点、慣習的必須通過点、結果的必須通過点の 3 種ある。「制度的必須通過点では、制度や法律や規則などの強制力により、行動や選択がある状況に収束している有り様が描かれる」。慣習的必須通過点は、「制度や法律や規則のような明確な収束力はないものの、社会で歴史的に成立・発達し、一般に認められている伝統的な、あるいは習慣化している、社会一般に通ずるならわしとして経験するような出来事にかかわる行動や選択のことを指す」。結果的必須通過点は、「制度的でも慣習的でもないけれども、ある経験をした多くの人びとの経験の帰結としてとらえられる行動や選択を示す概念である」。

本研究における OPP は、制度的必須通過点、慣習的必須通過点、結果的必須通過点の 3 種がとらえられた。第 1 期から 5 期についてまとめると、日本語指導が必要な児童生徒の多くが経験する慣習的必須通過点「日本名を名乗り通学」を辿り、結果的必須通過点「東日本大震災に遭遇」が分岐点としてもとらえられていた。日本語指導が必要な児童生徒の中には、日本生まれあるいは中途編入にかかわらず、本名をふせて日本名を名乗り学校に通う子どもがいる。本人が望み、日本名を選択する場合もあるが、日本の学校で差別やいじめに遭わないようにとの思いから、大人たちが決めることが多い。

4. 考察

本研究では、外国人集住地域で日本語指導を受けた中国人青年が中国と日本を移動する過程で、彼の内面の変化に影響を与える社会的文化的諸力をTEAを用いて明らかにするとともに、中国人青年の想像を可視化する試みを行った。

まず、社会的文化的諸力について述べる。SDは来日前にとらえられず来日後にとらえられた。日本語や日本の学校文化への戸惑いがSDとしてとらえられた背景には、来日時日本語未習であったことやそれまで日本人との接触がほとんどない環境で育ったことが要因として考えられる。SGは、来日前来日後のいずれも多数とらえられた。学級や国際教室の学習がスムーズに進み困難に直面しても乗り越えられた背景には、中国での豊かな文化体験と来日後に編入先の中学で同じような境遇の仲間との出会いが影響を与えたと思われる。

次に、内面の変化について述べる。TLMGの第2層では、未来志向抑制的想像と未来志向促進的想像が比較的多く見られた。他方、未来志向促進的想像の出現が助け合いや理解してくれる人との出会いに加えVTM〈中国人であることを隠すのをやめる〉過程で継続して出現している。この結果から、〈震災で助け合う〉、〈同じ志を持った友人と出会う〉経験や〈日中関係悪化による父との意見対立〉などが転機となり、未来志向促進的想像の出現を促したと示唆された。TLMGにおける第2層は「個人史とのすり合わせ」(サトウ2015a)の場である。Bさんの想像の方向は、ラブチャー(東日本大震災)を経験し変容した。想像をTLMGで可視化することは、ラブチャーを経験した人々に対して「何が課題であり、何がそれまでに「当然のこと」となっていたのか」を示す(Levy & Widmer 2005; Zittoun2009)。このことから、TLMGで中国人であることを隠すのをやめるプロセスは、「日本名を名乗り通学」し、中国人であることを隠して生きるという日本語指導を受ける児童生徒を取り巻く環境に対して、検討の余地があることを示唆した。

最後に、必須通過点の分析で得られた慣習的必須通過点「日本名を名乗り通学」では、東日本大震災

に遭遇後大学へ再入学を果たしたBさんの葛藤との関連が示されている。Bさんの住む外国人集住地域では、学校や地域社会で日本語教育を手厚くうける環境に恵まれてはいたが、母語教育を受ける機会はなかった。公立中学校に編入後は、中国語のできる中学校教師や友人たちとの出会いに恵まれたものの、日本語を中心とした言語環境で過ごしている。そして、中国人としての自己を隠し生きてきたことがTLMGから確認できる。TLMGの後半では、中国から来日した父親との間で、「日中関係悪化による父との意見対立」が起きている。岡村(2013)は、母国語教室の重要性について、日本語が十分ではない親と日本語中心の生活の中で母国語が話せなくなる子どもとの関係悪化への危惧や子どものアイデンティティが不安定になることへの危惧から実施されるようになった経緯があり、高等学校では支援体制が整っていないことが多いと指摘する。外国人の母語教育の必要性について、イ(2009)は、マイノリティの言語は、家庭で大人とのやりとりで劣らず周囲の子どもとのやり取りが重要であり、母語による教育はできる限り長期にわたって続けられることが望ましいと述べている。日本語指導が必要な児童生徒に対して、日本語だけでなく地域や学校で母語教育を受ける機会を増やしていけるような公式的・非公式的サポートの構築が急務である。

5. 結論と今後の課題

本研究では、外国人集住地域で日本語指導を受けた中国人青年が中国と日本を移動する過程で、彼の内面の変化に影響を与える社会的文化的諸力をTEAを用いて明らかにするとともに、中国人青年の想像を可視化する試みを行った。その際、想像が起きることを促進的記号の発生と仮定し、TLMGの第2層で記号として描いた。

SDの出現は、来日時日本語未習であったことやそれまで日本人との接触がほとんどない環境で育ったことが要因として示唆された。SGが、来日前来日後のいずれも多数とらえられた背景は、中国での豊かな文化体験と来日後に編入先の中学で同じような境遇の仲間に出会ったことが関係していた。さら

に、東日本大震災に遭遇した経験が分岐点／ラプチャーとなり、能動的な探求を行っている有様が描かれた。日本語指導が必要な児童生徒が地域や学校で母語教育を受ける機会を増やすための公式的・非公式的サポートの構築が求められているといえよう。

本研究では、TEA を用いて可視化するところまでは成しえたが、分岐点に関連のある TEA の他の概念（たとえば、BFP や OPP, ZOF など）とクローバー分析を整理できていない。さらに、社会的諸力である SD を行動や選択に制約をかけた時可能性を阻んだりするような何らかの力としてとらえた時に、その影響を受けた行動や選択を OPP と設定すると、そこから人の転換点が見えていき、レジリエンスとしてとらえる可能性も残されている（安田 2017）。これらの点も今後整理が必要であると考えらる。

謝辞

本稿を執筆するにあたり、調査にご協力いただいた B さんに心より感謝の意を表します。貴重なご意見をくださいました査読者の先生、TEA について楽しく学ぶ機会をくださいましたサトウタツヤ先生、安田裕子先生、大学院でご指導いただいた橋本ゆかり先生、イ・ヨンスク先生に厚く御礼申し上げます。

This work was supported by the Core University Program for Korean Studies through the Ministry of Education of the Republic of Korea and Korean Studies Promotion Service of the Academy of Korean Studies (AKS-2016-OLU-2250001).

引用文献

イ・ヨンスク (2009). 「ことば」という幻影—近代日本の言語イデオロギー (pp.253-255) 明石書店.
市川章子 (2017). 台湾人アイデンティティ再考—複線径路等至性モデリングを用いて—. 対人援助学研究, 6, 75-88.
伊東美智子 (2017). 第 1 節 社会人経験を経た看護学生の学びほぐし 安田裕子・サトウタツヤ (編) TEM でひろ

がる社会実装—ライフの充実を支援する (pp.69-88) 誠信書房.
岡村佳代 (2013). 第 5 章 外国につながる子どもたちの困難・サポート・対処行動からみる現状 加賀美常美代 (編) 多文化共生論多様性理解のためのヒントとレッスン (pp.101-123) 明石書店.
上川多恵子 (2017). 第 1 節 中国人日本語学習者の敬語使用 安田裕子・サトウタツヤ (編) TEM でひろがる社会実装—ライフの充実を支援する (pp.26 - 48) 誠信書房.
川喜田二郎 (2009). 発想法 創造性開発のために 84 版, 中央公論新社.
木戸彩恵 (2015). 4.4 移行, イマジネーション, そして TEM 「鳥の目」からの分析, 「亀の目」からの分析 安田裕子・滑田明暢・福田茉莉・サトウタツヤ (編) TEA 理論編 複線径路等至性アプローチの基礎を学ぶ (pp.97-100) 新曜社.
木村元 (2015). 学校の戦後史 (pp.162-164) 岩波書店.
サトウタツヤ (2012). 第 2 節 質的研究をする私になる 安田裕子・サトウタツヤ (編) TEM でわかる人生の径路—質的研究の新展開 (pp.4-11) 誠信書房.
サトウタツヤ (2015a). 1-1 複線径路等至性アプローチ (TEA) TEM, HSI, TLMG 安田裕子・滑田明暢・福田茉莉・サトウタツヤ (編) TEA 理論編 複線径路等至性アプローチの基礎を学ぶ (pp.4-8) 新曜社.
サトウタツヤ (2015b). 1-5 TEM 的飽和 手順化の問題 安田裕子・滑田明暢・福田茉莉・サトウタツヤ (編) TEA 理論編 複線径路等至性アプローチの基礎を学ぶ (pp.24-28) 新曜社.
サトウタツヤ (2015c). TEA 研究会 配布レジュメ (2015 年 9 月 3 日), 未刊行.
サトウタツヤ (2016). 複線径路等至性アプローチ (TEA) —分岐点分析の新手法として— 日本質的心理学会第 13 回大会 (2016 年 9 月 24 日) 配布レジュメ, 未刊行.
サトウタツヤ (2017a). 第 1 節 等至性とは何か—その理念的意義と方法論的意義 安田裕子・サトウタツヤ (編) TEM でひろがる社会実装—ライフの充実を支援する (pp.1-11) 誠信書房.
サトウタツヤ (2017b). 第 5 章 TEA は文化をどのようにあつかうか—必須通過点との関連で 安田裕子・サトウタツヤ (編) TEM でひろがる社会実装—ライフの充実を支援する (p.209) 誠信書房.
Zittoun, T. (2009). Dynamics of life-course transitions: A methodological reflection. In J. Valsiner, P. C. M. Molenaar, M. C. D. P. Lyra, & N. Chaudhary (Eds.) *Dynamic process methodology in the social and developmental sciences* (pp.405-430). New York: Springer. (木戸彩恵訳 (2015) 4.4 移行, イマジネーション, そして TEM 「鳥の目」からの分析, 「亀の目」からの分析 安田裕子・滑田明暢・福田茉莉・サトウタツヤ (編) TEA 理論編 複線径路等至性アプローチの

- 基礎を学ぶ (pp.97-100) 新曜社)
- Zittoun, T., & Cerchia, F. (2013). Imagination as expansion of experience. *Integrative Psychological and Behavioral Science*, 47 (3), 305-324.
- Zittoun, T., & Cerchia, F. (2013). Imagination as expansion of experience. *Integrative Psychological and Behavioral Science*, 47 (3), 305-324. (木戸彩恵訳 (2015) 44 移行, イマジネーション, そして TEM「鳥の目」からの分析, 「亀の目」からの分析 安田裕子・滑田明暢・福田茉莉・サトウタツヤ (編) TEA 理論編 複線径路等至性アプローチの基礎を学ぶ (pp.97-100) 新曜社)
- Zittoun, T., & De Saint-Laurent, C. (2014). Life-Creativity Imaging one's life. In V. Glaveanu, A. Gillespie, & J. Valsiner (Eds.) *Rethinking Creativity: Contributions from social and cultural psychology*. London: Routledge. (木戸彩恵訳 (2015) 44 移行, イマジネーション, そして TEM「鳥の目」からの分析, 「亀の目」からの分析 安田裕子・滑田明暢・福田茉莉・サトウタツヤ (編) TEA 理論編 複線径路等至性アプローチの基礎を学ぶ (pp.97-100) 新曜社)
- Zittoun, T. & Valsiner, J. (2016). IMAGINING THE PAST AND REMEMBERING THE FUTURE How the Unreal Defines the Real, Sato, T., Mori, N., & J. Valsiner (Eds.) *Making of the Future: The Trajectory Equifinality Approach in Cultural Psychology* (pp.3-19) Age Publishing.
- Zittoun, T. (2017). Imagining self in a changing world: An exploration of "Studies of marriage". In M. Han & C. Cunha (Eds.) *The subjectified and subjectifying mind*. Charlotte, NC: Information Age. (木戸彩恵訳 (2015) 44 移行, イマジネーション, そして TEM「鳥の目」からの分析, 「亀の目」からの分析 安田裕子・滑田明暢・福田茉莉・サトウタツヤ (編) TEA 理論編 複線径路等至性アプローチの基礎を学ぶ (pp.97-100) 新曜社)
- 趙衛国 (2007). 中国人高校生の異文化適応過程－文化的アイデンティティ形成の要因に注目して－. 東京大学大学院教育学研究科紀要, 47, 337-346.
- 中村和夫 (2015). 3-3 ポドテキスト ヴィゴツキー理論と TEM (TEA) 安田裕子・滑田明暢・福田茉莉・サトウタツヤ (編) TEA 理論編 複線径路等至性アプ
- チの基礎を学ぶ (pp.65-68) 新曜社.
- Valsiner, J. (2007). *Culture in minds and societies: Foundations of cultural psychology*. New Delhi: Sage. (サトウタツヤ監訳 (2013) 『新しい文化心理学の構築—心と社会—の中の文化』 新曜社)
- 広崎純子 (2007). 進路多様校における中国系ニューカマー生徒の進路意識と進路選択－支援活動の取り組みを通じての変容過程－. 教育社会学研究, 80, 227-245.
- 廣瀬眞理子 (2012). 1-2 ひきこもり親の会が自助グループとして安定するまで 安田裕子・サトウタツヤ (編) TEM でわかる人生の径路－質的研究の新展開 (pp.71 - 87) 誠信書房.
- 法務省 (2020) 第1表 国籍・地域別 在留資格 (在留目的) 別 在留外国人 2020年6月末
<http://www.moj.go.jp/isa/policies/statistics/toukei_ichiran_touroku.html> (2021年1月12日)
- 文部科学省 (2020) 「外国人の子供の就学状況等調査結果について」 (令和2年3月)
<https://www.mext.go.jp/content/20200326-mxt_kyousei01-000006114_02.pdf> (2021年1月12日)
- 安田裕子 (2015). 2-2 分岐点と必須通過点 諸力 (SDとSG) のせめぎあい 安田裕子・滑田明暢・福田茉莉・サトウタツヤ (編) TEA 理論編 複線径路等至性アプローチの基礎を学ぶ (pp.35-40) 新曜社.
- 安田裕子 (2017). 第2節 生みだされる分岐点－変容と維持をとらえる道具立て 安田裕子・サトウタツヤ (編) TEM でひろがる社会実装－ライフの充実を支援する (pp.11-25) 誠信書房.
- Levy, R., Ghisletta, P., Le Goff, J. -M., Spini, D., & Widmer, E. (2005). Incitations for interdisciplinarity in life course research. In R. Levy, P. Ghisletta, D. Spini, & E. Widmer (Eds.) *Towards an interdisciplinary perspective on the life course* (pp.361-391). Amsterdam, etc.: Elsevier (木戸彩恵訳 (2015) 44 移行, イマジネーション, そして TEM「鳥の目」からの分析, 「亀の目」からの分析 安田裕子・滑田明暢・福田茉莉・サトウタツヤ (編) TEA 理論編 複線径路等至性アプローチの基礎を学ぶ (pp.97-100) 新曜社.)

(2017. 6. 1 受稿) (2021. 9. 1 受理)
(ホームページ掲載 2021年9月)